ここは恋愛部

高橋　雅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ここは恋愛部

【Ｎコード】
Ｎ０６１７Ｖ

【作者名】
高橋　雅

【あらすじ】
失恋した女と、プロポーズを断られた男。
恋愛のための大人の部活動「恋愛部」で出会った２人は、本当の恋をすることができるのか？　※念のためＲ１５にさせていただきましたが、今のところそういう描写はありません。

第1話　女の事情・1

ああ、もう本当に最悪。
このまま消えてしまいたい……

帰宅するなり自分の部屋に閉じこもり、ベッドに倒れ込んで枕に顔を埋めた。
失恋した。派手に。
それも相手は……

バタンっと玄関のドアが開く音が聞こえ、慌てて身体を起こしてドアに鍵をかける。自分の部屋に鍵がついていたことを、こんなに有難く思ったことはない。
トントンと足早に階段を上る足音が聞こえ、それは真夜子の部屋の前でぴたりと止まった。

「真夜子？　ちょっと開けて」

ドンドンといつもより手荒にドアをノックする音が聞こえる。

「……開けたくない！　帰って、蓮にい」

枕からわずかに顔を上げて、ドアに向かって低く答える。

「そんなこと言うなよ。俺……真夜子のこと、心配なんだよ」

「心配なんてしなくていい！　お願いだから帰って！！」

その心配は、決して恋人に向けられるようなものではなく、ただ

の『妹』としてしかでない。
それにハッキリと気づかされた今、彼の存在は真夜子には辛いだけだ。

「真夜子。頼むから、ここを開けて」

伺うような優しい声色に、じわりと涙が浮かぶ。
男の人にしてはやや高めの、アナウンサーのような爽やかな声。
彼が『真夜子』と呼ぶ響きが、すごくすごく好きだった。
思わず吸い寄せられるようにドアを見つめる。
このドアを開ければ彼がいるとわかっているのに、それを堪えるなんて初めてのことだ。

「真夜子」

ただ必死に、唇を噛みしめた。これ以上、この声に答えてはいけない。

だんまりを決め込んだ真夜子に呆れたのか、ドアの前で佇んでいたその人が諦めたように部屋を後にした。
例え見えなくても、その気配が消えたことくらいわかる。
それくらい、彼とは長い付き合いなのだ。

トントンと静かに階段を下りる音が聞こえたかと思うと、1階から能天気な自分の母親の声が聞こえてきた。

「あら、蓮くん？　今日は真夜子とご飯食べに行くって聞いてたけど」

蓮と真夜子は、隣同志に住む幼馴染だった。

それこそ真夜子がおむつの頃からの付き合いで、もはや親戚のような間柄だ。こうやっていきなり部屋に上がってくることも珍しくはないし、双方の親とも親しい。

「あー、なんか……真夜子、具合悪いみたいで……」

「ま！　珍しい！　蓮くんとの約束なら、這ってでも行きそうなあの子がねえ～」

「あの、お邪魔しました。真夜子に……また明日来るって言っといてください」

「ハイハイ～。また誘ってやってね♪」

軽はずみな母親の返事に腹が立ち、思わずドアめがけてぬいぐるみを投げつけた。

ぽふっと情けない音がして、可哀想なぬいぐるみはコロコロとベットの下に転がり落ちる。

（明日も来る？　冗談じゃない！　こっちは、こっちは……）

思わずまた涙腺が緩みそうになり、慌ててぐっと奥歯を噛みしめる。

こんな夜にこれ以上泣いてしまっては、明日の朝に瞼が腫れあがってしまう。

新人ではあるが一流化粧品メーカーに勤める身の上で、そんなことは絶対にできない。

必死に涙を堪えていると、昼からろくに食べてないお腹がぐうーっと大きな音をたてた。精神的なショックで食欲は全くなかったが、

身体の反応は正直だ。

（今日の食事、楽しみにしていたのに……。料理、ほとんど手をつけてないし。蓮が……蓮にいが、悪いんだ。あんなこと聞かせるから）

恨みがましく心の中でそう呟いてから、ゴロリと寝返りをうち、つい数十分前に告げられたことを考えていた。

「け……結婚？」

目の前に並ぶ御馳走たちが、急に色彩を失ったかのような感覚にとらわれた。

頭がぐるぐると回っているような気がして、慌ててフォークとナイフを置く。

「結婚って……ちょっと待って。蓮、どういうこと？」

食事が運ばれてきて早々に告げられた言葉に、なんだか吐き気すら混み上がってきそうだ。

しかし蓮はそんな真夜子の様子に気付く様子もなく、流れるような動作で肉を口へと運んだ。

「うん。真夜子も知ってるだろうけど……大学時代の友達の、桜。こっちに帰ってきてから付き合ってたんだけど……そろそろお互い年も年だし、身を固めようかって」

ちょっと待て。

口の中に残っていた一口目の野菜たちを、気持ちを落ち着けるために水と一緒に喉の奥に流し込む。

「付き合ってるって……いつから？」

「半年くらい前かな。仕事帰りに会うのがほとんどだったけど」

それは……盲点だった。

確かにここ何カ月間、やけに仕事の帰りが遅いとは思っていたけれど、仕事が忙しいのだろうくらいにしか思っていなかった。

実際、今年の春に蓮と同じ会社に就職した男友達から、蓮は営業部のホープで若手男性社員の憧れであると聞かされてからは、仕事に対して口を出さないようにしていたのだ。

真夜子自身も大学を無事卒業して念願の会社に入社してからの半年間、慣れない仕事や人間関係でいっぱいいっぱいだったせいもある。

そのせいか、年頃になってからは欠かせなかった蓮へのマークが、おろそかになっていたことも否定できない。

“仕事の邪魔になるような女にはなりたくない。今は自分も仕事が第一！”

そう思って、ひたすら耐えていたのに。

まさか仕事帰りに、自分の知らないところで彼女と逢瀬を重ねていたなんて。

「だって……蓮、土日は家にいたじゃん。私といっつも出かけたりとか……」

「桜の仕事は接客業だから、土日は仕事なんだ」

さらりと言われた言葉に、ショックを受ける。

真夜子はデートだと思っていたのに、蓮にとっては彼女がいない間の暇つぶしでしかなかったのか？

「蓮……私って、蓮の、何？」

微かに震える手をぎゅっと握りしめてから、ゆっくりと問いかける。

「何って……可愛い妹だと思ってるけど」

きょとんとした様子で蓮が口にしたセリフに、真夜子はさらに打ちのめされた。

「妹？」

「うん」

「ただの妹を……こうやって、デートみたいに連れ出したりする？」

「え、何かおかしいか？」

悪びれる様子もなく、蓮が首をかしげた。

「誕生日にくれた指輪は……」

「お前、二十一歳の誕生日に男の人からプラチナの指輪をもらった

ら幸せになれるから、絶対欲しいって言ってただろ？」

確かに、去年の誕生日の1か月前にはそうおねだりをした。

でもだからって、彼女でもないのに高価なプラチナの指輪をプレゼントするものだろうか。

小さなピンク色の石がついた指輪を右手の薬指にはめても、何も言わなかったくせに。

手を繋げば優しく握り返してくれ、誕生日には必ず一番欲しいものをくれる。

寄り添えば微笑み、髪を撫でてくれる。

それが、まさか、ただの『妹』に対する行為でしかなかったなんて。

俯いた瞳から、ぽとりと涙が落ちた。

「え？　真夜子？」

慌てたように蓮が真夜子へと手を伸ばした。

「蓮、私、私……」

「どうしたんだよ？　何か仕事で辛いことでもあったのか？」

そんな訳、ない！

この後に及んで、なんと鈍い男なんだろう。

「蓮、私、蓮のことが好きなの」

「うん。俺だって、真夜子のことが好きだよ」

「違う！　その好きじゃない！　私……」

なんて言っていいかわからず、口ごもる。

ずっと、気づいてくれてると思っていたのに。

しかし、相変わらず目の前の男は心配そうな顔で真夜子を見ているにすぎない。

すうっと息を吸い込み、彼に引導を渡す覚悟を決めた。

「蓮、私、蓮のことが、異性として好きなんだよ。一人の男の人として、好きなの」

「……え？　真夜子？」

「ずっと……わかってくれてると思ってた。こうやってわざわざ外で会ってくれるのも、私はデートだと思ってた」

蓮の顔から、すうっと血の気がひいた気がした。

（そこは……青ざめるところじゃなくて、顔を赤らめるとこでしょ？！）

訳のわからない怒りがこみ上げる。

「今まで私が、一番蓮の側にいたんだよ。絶対私が一番蓮のこと知ってる。私が一番蓮のこと好きだよ。だから、お願い……」

「ま、真夜子……」

蓮は、今まで見たこともないような困った顔をしていた。

２０年以上も付き合いがある彼が、こんな顔をしているのは初めて見た。

「ごめん、俺……真夜子がそんな風に思ってくれてるなんて、全然……全然気づかなくて」

カチャリ、と音がして、蓮が持っていたナイフとフォークを皿の上に置いた。

その腕からちらりと見えた腕時計に、まるで見覚えが無いことに気付く。

もしかして……彼女からのプレゼントだろうか？

真夜子の胸が、ずきんと音をたてた。

「真夜子の気持ちには、答えられない。俺にとって、真夜子は可愛い妹で……」

その言葉を、最後まで聞く勇気はなかった。

「……帰る」

「え？」

呆気にとられる蓮を残し、気づけばバッグを掴んで店の外に飛び出していた。

通りがかったタクシーを無理矢理止め、猛スピードで家に帰ってきた。

しかし悲しいかな、蓮の家は隣である。

なんの遠慮もなく家に上がることができるし、この部屋の固く閉ざしたカーテンを開ければ、数メートル先に見えるのは蓮の部屋の窓なのだ。
今日はなんとか帰ってくれたものの、このまま何日も会わないでいる訳にはいかない。

ずびっと鼻をすすった。

自分の気持ちを伝えずに、「結婚？　うわ～おめでとう！」なんて能天気なフリをすることは出来なかった。
それくらい、自分は蓮の近い場所にいて、彼の気持ちもきっと自分に向いているという自信もあったのだ。

「サイッテー……」

独り言をつぶやき、携帯をぱこっと開いた。
待ち受けでは、真夜子と蓮が顔を寄せ合い並んで微笑んでいる。

（これだって……、ノリノリで撮ってくれたくせに）

小さい頃から『蓮にい』と呼んでいたのを、真夜子が就職したのをきっかけに『蓮』と呼び捨てで呼ぶようにしていた。

『今日から蓮にいのこと、“蓮”って呼びたい！』

ドキドキと胸を高鳴らせながらそう言ったら、蓮は優しく微笑んで頷いてくれたのに――。

もらって以来ずっと右手の薬指にはめていた指輪を、ゆっくりと引き抜いた。

夏の名残りを感じさせるかのような日焼けの痕が、はずしてもなおそこに指輪が存在していたことを表していて、またじわっと新しい涙がこみ上げてきた。

第2話　女の事情・2

「……で？」

真夜子の話を適当に相槌をうちながら聞いていた会社の先輩である西野紫が、頬杖をついたまま心底つまらなそうに言った。

紫は真夜子より7つ年上の29歳で、出身大学が同じだったことから何かと可愛がってもらっている。

本当は一刻も早く話を聞いて欲しかったのだが、忙しい紫と一緒に昼休みを取ることはできず、就業時間が過ぎた休憩コーナーでコーヒーを飲んでいる紫を、ようやく捕まえたのだ。

「ちょ……チーフ！　そんな言い方ないですぅ～！」

聞くも涙、語るも涙の話のはずなのに、紫はふうっとため息交じりの吐息を吐いたにすぎなかった。

「青山、アンタいくつよ？　たかが失恋でしょ？」

「た、たかがって……物心がついてから、ずっと好きだった人なんですよ？　それこそ、3歳くらいからだから……19年とか。就職してやっと追いつけて、ようやくデートにも連れて行ってもらえるようになったと思ってたのに……」

「デートったって、結局アンタが勝手に勘違いしてただけじゃないの」

「そ、そりゃ、そうですけど……」

蓮の優しい笑顔を思い出し、またしても目尻に涙が浮かびそうになる。

「はいはい、わかったわかった。お子ちゃまの青山にはぴったりの恋でちたね～」

からかうような口調に、思わずむっとなる。

「いくらチーフでも、そんな言い方ないです……」

「で、その話を私にした根拠はなんなの？　私に話したからって慰めてもらえる訳じゃないのは、アンタが一番わかってることでしょう？」

そうなのだ。ここからが本題である。

「チーフ……最近、婚活してるって言ってましたよね？」

「そりゃ、言ったけど？」

「私も！　したいんです！　婚活！！」

テーブルを挟んで身を乗りだした真夜子に、紫が心底嫌そうな顔をした。

「……何言ってんの？」

「ぜひ連れてってください！　先輩の婚活とやらに！」

「ばーか！」

ペチンっとボールペンでおでこを叩かれた。

「い、いたっ」

「アンタねえ……婚活をなめないでよね」

「なめてなんかないです！　私、本当に……結婚したいんですう！」

口をとがらして訴える。

「安易だね。どーせ、結婚を決めて、その『蓮にい』とやらを見返したいだけでしょ？」

「それは……否定しないですけど」

「婚活はねえ、いわば最後の手段よ！　みんな少しでも自分にとって有利な相手を見つけるのに必死なの。アンタみたいな小娘でも、若いってだけで最強の武器を持ってるんだから。リーサルウェポン！　協力なライバルよ」

ボールペンを人差し指と親指に挟みぶんぶんと振りながら、紫がふんぞり返った。

「婚活に連れてけってことは、簡単に言えば私が登録してる結婚相談所に青山も登録して、そこのパーティーとかに参加するってことだよ？　合コンとは違うんだから。アンタにそんなお金ある？」

「え、お金……」

真夜子の顔から勢いが消える。

「じょ、女性は無料とかじゃないんですか？」

「ばーか。その辺のサクラが混じったような適当なお見合いパーティーとかじゃないんだから。私が入ってるとこ、会社の福利厚生で割引がきいてるけど、それでも入会金に三万、会費が毎月二万、データ登録料に紹介料に……」

「チーフ……結婚相談所に会社の福利厚生使ってるんですか……」

「い、今はそんな話じゃなくて！　とにかく、そんだけアンタに出せる？」

実家から通っているから比較的余裕があるとはいえ、入社半年のOLにそんな金額が出せる訳がない。

「無理です……」

しょぼんと肩を落とした真夜子に、たたみかけるように紫が言った。

「そもそもねえ、幼馴染の好意すらはきちがえてる恋愛初心者のアンタには、婚活なんて無理！　騙されるか遊ばれるのがオチ！」

ビシッと人さし指で指されながら痛いところをつかれ、思わず顔がひきつる。

的を得すぎてて、ぐうの音もでない。

「婚活以前の問題だよ。まず恋愛がわかってないもん」

「恋愛なら、ずっとしてましたよ！」

「それはただの片思い。相手の気持ちを都合よく勘違いしてた挙句、自分の気持ちすら伝わってなかったんじゃないの。どんなに近くにいたって、一方通行だったら意味がないのよ。婚活云々の前に、まずきちんと恋愛しなよ」

「……」

紫の言葉に間違いがないだけに、何も言いかえることができなかった。

しかし、それができたら苦労はしない。

「まず、恋愛を経験しなさい」

「そんなこと言ったって……この状況で、どうやって恋しろって言うんですかぁ？」

真夜子の言葉に、紫がうーんと腕を組んだ。

高校は女子高で、大学も女子大。勤め先も圧倒的に女性の多い化粧品メーカー。

たまにいるイケてる男性社員はめざとい誰かにあっという間に手がつけられてしまうか、お友達にしかなりようがないオネェ系、はたまた既婚者ばかりだ。

恋なんて、したくてもできない。相手がいなければ、出会いだってない。

だからこそ見た目が派手で綺麗な紫だって、結婚相談所にまで登録しているのだろう。

家に帰れば、隣の家には蓮がいる。
そっとしておいてほしくても、しょっちゅう顔を見なければいけない。
その辛さで、身が切られそうな想いだった。

「んー……あ、そうだ」

しょんぼりと落ち込む真夜子を黙って見ていた紫が、ふいに何かを思い出したかのように、ごそごそと鞄をあさりだした。

「あった。これこれ」

そう言って、ぽいっと真夜子の前に、一枚の名刺くらいの大きさの小さいカードを投げてよこした。

「なんですかこれ。恋愛……部？」

紫がよこした少し厚めの白いカードには、金色の文字で「恋愛部」と書かれていた。
その下には住所と電話番号が書かれている以外に、特に説明書きはない。ひっくり返してみても、何も書かれていなかった。

「婚活で知り合った人にもらったんだけど。あ、と言っても女の人ね」

「はぁ……」

紫の意図がわからず、ただじっとそのカードを見つめる。

「今の世の中、いい大人でも恋愛できない人が増えてるんだって。

そんな人たちのために、その恋愛部とやらがあるらしいよ。私には関係ないけどー」

「えー……これって出会い系とかじゃないんですよね？　なんかうさんくさ……」

渡されたカードの端っこをひらひらと持ち顔をしかめると、ひったくるように紫がカードを奪った。

「今のアンタに、選択肢はないよ」

そして、ポケットから携帯を取り出すと、名刺に書かれた番号におもむろに電話をかけ始めた。

「あ、もしもし……はい、入部希望でーす。私じゃないですけど、名前は青山真夜子２２歳でーす」

「ちょ、紫さん！！」

「黙ってろ、つうの」

慌てて電話を制止しようとしたが、紫の凄みのあるセリフに思わず縮みあがる。

「はい。今日で大丈夫です。１９時ですね。それじゃー」

ぴっと携帯を切り、カードを再び真夜子の前に投げた。

「私、行かないです！」

ぷうっと頬を膨らました。

「ほう。わざわざアンタのために予約をしてやった、私の顔の泥を塗ると？」

「そ、そんな……お願いしてない、です……」

「婚活連れてけって言ったの、アンタじゃん。まさか、私におんぶに抱っこでアチコチ連れてってもらおうとでも思ってたの？」

「う……」

「この、甘ったれ」

本当なだけに何も言えずに黙りこくっていると、再びボールペンがおでこに飛んできた。

「いたっ！」

「例え結婚相談所に登録したって、結局は一人でがんばらなきゃいけないんだよ？」

紫が、呆れたようにため息をついた。

「行かなくても結構。でも、そしたら私は金輪際一切アンタから恋愛の話は聞かない。相談にも乗らないし、もちろん婚活にも連れていかない」

「そ、そんなあ……そもそも、ここ……大丈夫なんですか？」

「その点は問題ないと思うよ。結婚相談所って身分もきちんと明かさないと入会できないし、変なことしたら結構な額の罰金払って即退会だもん。そのパーティーも、お互いに年収制限のあるセレブなパーティーだったしね」

そんなパーティーがあるとは。紫はどうやら、真夜子の想像以上の年収を得ているらしい。

多少気は強い気もするが、美人で収入の多い紫でも婚活は思うようにいかないなんて……思わずため息が出た。

「まあ、ちょっとは一人でがんばってみなよ。じゃ、私まだ仕事が残ってるから」

ぽんっと真夜子の方を叩き、紫はさっさと休憩室から姿を消した。

その後ろ姿を恨めしい気持ちで見送りながら、紫が置いていったカードをもう一度手にとる。

同じ商品開発部に所属していても、入社1年目の真夜子とチーフの紫とでは、仕事量も勤務時間も全然違う。

（せめて、夜ご飯にでも付き合ってもらおうと思ったのになあ……）

はあ、と再び悩ましいため息が漏れた。

こんな日に限って、同僚も友達もつかまらない。用もないのにダラダラと休憩所に居座るわけにはいかず、仕方なくノロノロと会社を出てしばらく立ちすくんだ。

こんな早い時間に家に帰れば、また蓮と顔を合わせてしまうかもしれない。

それだけはどうしてもイヤだった。

『一人でがんばってみなよ』

紫の言葉が頭によぎる。

「よし！　なるようになれ！」

一人、力強く声に出し、ぐっと手を握り締めていた。

第3話　女の事情・3

会社から二駅先のオフィス街に、『恋愛部』の入っているビルはあった。

入口すぐの入居してあるテナント名を眺めてみるが、『恋愛部』なんてふざけた名前はかかっておらず、カードに書かれていたはずの3階は空白になっていた。

不安を覚えて他の階をチェックしてみるがやっぱり『恋愛部』はなく、デザイン事務所や税理士事務所の名前が連なっていた。

どうやら、事務所として使われることの多いオフィスビルらしい。

（とりあえず、怪しいビルではないみたい……）

ひとまずほっとしつつ、意を決してエレベーターへと足を運んだ。

3階に辿りつき、ドアの前のインターホンを勇気を出して押す。

『ハイ』

ピンポーン、と軽やかなチャイム音の後、インターホンから若い男性の声が聞こえてきた。

「あ、あの……先ほど電話した、青山と申しますが……」

『お待ちしておりました。少々お待ちください』

プッッと会話が終了したかと思うと、数秒後にかちゃりと目の前のドアが空いた。

「お待ちしておりました。青山さま」

涼やかな声が聞こえたかと思うと、３０歳くらいと思われる綺麗な女性が顔をのぞかせた。
さっきインターホンに出たのは男性とは、どうやら別の人らしい。

「どうぞ中へ」

「お、お邪魔します……」

促すようにドアを大きく開けられ、真夜子は俯きがちにおずおずと足を踏み入れた。

案内されたのは広々としたリビングのような空間だった。
結婚相談所……とは厳密には違うのかもしれないが、そういうところはこんな感じなのだろうか？
普通の会社の事務所などとは少し違う、まるでモデルルームにでも訪れたような気分になるのは、そこかしかに置かれている調度品のセンスの高さのせいかもしれない。

「どうぞ、おかけになってください」

女性にすすめられるがままに、椅子に腰をおろした。

「まず、ようこそ『恋愛部』においでくださいました。スタッフの桜田と申します」

背は１７０近くありそうだ。すらりとしたスレンダーな体型で、黒い髪を後ろでひとつにまとめている。一瞬クールな顔立ちに見えるが、その顔に浮かぶ微笑みは意外と温かみがある。美人さんだな、と素直に思った。

彼女は胸ポケットから名刺ケースを取り出し、スマートな所作で名刺を真夜子に差し出した。

「ど、どうも……」

社会人とはいえ、営業経験のない真夜子にとっては、名刺を差し出されたことなんてない。

慌てて立ち上がりぎこちない動きでそれを両手で受け取ると、そこに並ぶ文字をマジマジと見つめた。

『恋愛部　スタッフ　桜田文乃』

シンプルな名前と電話番号、メールアドレスが載っただけの名刺だ。

その後に訪れた沈黙が、桜田が真夜子が名乗るのを待っていることに気付いた。

「あ、あの……青山真夜子と言います。今日は、その……」

「おいおい話しましょう。ひとまず安心してください」

促されるままに腰をおろすと、そのタイミングを待っていたかのように、メガネをかけた男性がお盆に飲み物を載せて現れた。

２０代後半くらいだろうか？

真っ白いパリっとしたＹシャツに紺のシンプルなネクタイをした細身のスーツ姿の彼は、サラリーマンというには少しスタイリッシュすぎる気がする。

化粧品会社という職場柄、真夜子の会社にもおしゃれな男性は多いが、彼はまた別の匂いがする。柔らかそうな茶色い髪に細いフレームのメガネが、まさに“草食系男子”という感じだ。

失礼かもしれないと思いつつも、真夜子はきょろきょろと目の前の二人を観察するのをやめられない。

「どうぞ」

じっと見つめる真夜子の視線を受け止め、にっこりと笑って目の前にカップをカチャリと置いた。その声色から、彼が先ほどインターホンに出た男性だということがわかる。

カップからは紅茶の優しい香りが立ち上っていて、真夜子は勧められるがままにその琥珀色の液体に口をつけた。

「……美味しい」

お世辞ではなくて、本当だった。こんなに美味しい紅茶は、今まで飲んだことがない。

真夜子が思わず口元を緩めたのを見計らったように、桜田が口を開いた。

「あなたのような女性のために、『恋愛部』はあるのです。私たちを信頼して、まずお話を聞かせていただけませんか？」

ゆっくりとして落ち着いた桜田の言葉に促されるように、真夜子は口を開いた。

「あの……今日、は、会社の先輩にここを紹介してもらいまして」

「はい」

「実は、昨日……私、失恋してしまいまして」

ちらりと目を上げると、桜田が悲しそうな笑みを浮かべながらも優しく頷いた。真夜子の話を、きちんと聞いてくれている。

そう感じると、咳をきったように感情がこみ上げた。

「相手は幼馴染で……物心がついたころから、彼のことがずっと好きだったんです。ずっと……彼の後を追ってたんです。ずっと子供扱いされてたけど、社会人になって、少しは彼の側に行けたと思ったのに」

じわりと涙がにじんだ。

「それでも……やっぱり私は、妹でしかなかったみたいで。何回もデートして、誕生日には指輪をくれて、すごく嬉しくて、これで彼女になれたんだって思ってたのに、それは、妹に対してでしかなくて」

こんなことを初対面の相手に話してしまうなんて、どうかしている。

そう思って言葉は止まらず、涙をこらえるためにも膝の上に置いていた手をぎゅっと握りしめた。

「想いが通じたんだって、思ってたのに。私、妹に対しての愛情だってこともわからなかったみたいで……自分が情けないです」

「情けないなんて、そんなことないですよ」

お盆を持ったまま桜田の少し後ろに控えていた若い男性が、優しげな声で言った。その言葉に賛同するようにウンウンと縦に首を振る桜田を見上げて、真夜子は小さく息を吐いた。

「……本当は、婚活でもしようかと思ってたんです。手っ取り早く、幸せになりたくて。幸せな結婚をして、蓮にいを見返してやりたくて。でも、職場の先輩が、それは違うって」

「そうですね」

黙って聞いていてくれた桜田が、一言優しくそう言った。

「きっと今のままで婚活をしても、幸せな結婚は難しいと思います」

「そう、でしょうか……」

「幸せな結婚には、幸せな恋愛がつきものです。特に、多くの女性の場合には」

その言葉の意味をイマイチ噛み砕くことが出来ず、ぼんやりと桜田の顔を見返す。

「重ね重ね申し上げますが、ここはあなたのような女性をお待ちしていました。私たちは、あなたが素敵な恋愛をしてくれることのお手伝いをいたします。ご安心ください」

――安心……。

状況は何も変わっていないはずなのに、彼女にそう言われると不思議と心が落ち着いた気がした。

「よ……よろしくお願いします！」

幸せな恋愛がしたい。もう、独りよがりな恋はたくさんだ。

気づくと真夜子は立ち上がり、スタッフの二人に対して深々と頭

を下げていた。

１時間ほどの面談を終え、真夜子は一人でカフェの中にいた。

冷たいカフェラテは火照った頭と身体を冷やしてはくれるが、さっき恋愛部で飲んだ紅茶の方が断然美味しい気がした。

ぼんやりと入会書に目を通しながら、桜田の言葉を反芻していた。

「ここは、恋愛をしたいと思う大人たちのための、サークル活動とでも思ってください。入会の条件は２０歳以上の男女で、心から恋愛をしたいと望んでいること。結婚が最終目的ではありません。あくまでその前の段階、恋愛が目的です」

流れるように説明を終え、にっこりと桜田が微笑んだ。

「すぐにでも結婚をして、相手にその姿を見せたいというお気持ちは痛いほどわかりますが……あなたには時間をかけて新しい恋愛をして、傷ついた心を癒すことも必要です」

“すぐに誰かを紹介できる訳ではない”と遠まわしに言われたようで、ほっとしたような残念なような、複雑な気持ちが胸をうずまく。

「マッチングに会う男性がいればすぐにご案内できますが、あまり先を急がないでください。必ず、あなたには新しい恋愛が訪れます。そしてそのお手伝いを私たちにさせてください」

自信に満ちた桜田の言葉から、見栄やはったりといった類のものは感じられなかった。

（あの自信はなんなんだろう……今までの経験と実績、とか？）

そこまで考えて、はっと息をのんだ。

そういえば、金銭的な話をまるでしていない。

『あんた、結婚相談所がいくらかかるか知ってるの？』

脳裏に、会社の先輩の紫の言葉が浮かぶ。

入会金に月会費、紹介料に活動費……

（まさか、私、騙されてないよね！？　後から、高額な料金を請求とか……）

慌てて桜田に電話をしようとして、ふと指が止まった。

契約書を書いた訳でもないので、フルネームを名乗ったもののこちらの個人情報はわからないはずだ。

真夜子の男性の好みなどの詳しい話をするために後日訪れる約束をしてはいるが、そもそも今の段階では金額が発生していないだろう。

どうしようかと悩んでいる時に、カフェの外の人の流れに、目がいった。

「あ……」

一人でいるのに、思わず口から声が洩れる。

見間違うはずがない。

蓮が、歩いていた。隣に女性を連れて。
彼女の手を握り、優しくその顔を覗きこんでいる。
その顔に浮かぶ表情に、衝撃が走った。

（蓮にい……あんな、顔、するんだ）

真夜子を見つめる時とは全く違うその眼差しに、ぎゅっと心臓を掴まれたかのような痛みを覚えた。
その目からは、愛おしさと情欲が溢れている。
今ここが人に溢れた場所でなかったら、二人は口づけを交わしていたかもしれない。
そんな変な確信さえ沸いた。

あんな顔、見たことがない。

カフェの中からぼんやりと見つめる真夜子に気付くはずもなく、二人はあっという間に視界から消えていった。
確定的だ。
昨日の話が嘘でもなんでもなく、事実なのだということに打ちひしがれる。
下を向けば、涙がこぼれそうだった。

（やっぱり……桜田さんの言うこと、信じてみよう）

うさんくさい話だと、怪しむ気持ちが無い訳ではない。

でも今は、何かにすがらないと、辛すぎた。

第4話　男の事情・1

「これ、何？」

予想外の言葉に、修矢の手が止まった。

「何って……」

ホテルのレストランで、最高の料理に最高の夜景。プロポーズとしては、自分が考えうる最高の演出をしたつもりだった。

食後のコーヒーを楽しんでいる時にそっと差し出したリングケースに対して、まさかそんな問いが返ってくるだろうとは思ってもいなかった。

「開けてみろよ」

かろうじて残っているプライドを奮い立たせ、リングケースを目の前にいる彼女・有紗へと押しやる。

彼女は黙ってそれを受け取り、ぱこっと開いた。

そこに入っているのは、ダイヤモンドの煌めくエンゲージリングだ。

給料3カ月分とまではいかないが、仕事でそれなりに収入を得ている修矢にとっても結構な金額であった。

それなりに嬉しい顔はするだろうと思っていた彼女は、戸惑うような視線でケースを閉じた。

――何故だ？

「修矢……まさかとは思うんだけど、これ」

「婚約指輪のつもりだけど」

彼女の言葉にかぶるように、眉をひそめてそう答える。

他になんだというのだ。

有紗とは、1年以上の付き合いが続いている。もちろんそれは大人の付き合いだ。

彼女は28で、修矢は29になった。

お互い、結婚を意識するような年齢だろう？

そんな修矢の心の中の想いを打ち砕くかのように、有紗がため息をついた。

「受け取れないわ」

「……は？」

思いがけない事態に、目が大きくなる。

「修矢が私と結婚したいと思ってるなんて、全然知らなかった」

「お前……何言ってるんだよ」

彼女は同じ会社の同僚でもある。

少々性格はキツイが、間違いなく社内イチの美人でスタイルがいい。仕事もできる。彼女を連れて歩くのは、男として鼻が高かった。

「お互い、いい年だろ。俺だってそろそろ身を固めておかないと、出世にも響くし……」

「私と修矢で、やっていけると思うの？」

修矢の言葉を遮るかのような有紗の言葉に、修矢の口が止まった。

「無理。私、そもそも家庭に入る気なんて全然ないし……まだ遊びたい年頃だし」

修矢が言う“身を固める”ということが、家庭に入ってもらうつもりだということを、有紗はわかっているようだった。

２８にもなって、『遊びたい年頃』とはなんだ。

思わず修矢の顔に、呆れたような表情が浮かんだ。

「ホラ、ね。今、修矢は私のことバカにしてるでしょう？」

そんな修矢の態度を、有紗が逆手にとった。

「修矢はかっこいいしスタイルもいいしお洒落だし、仕事もできる。話題も豊富だし、一緒にいて楽しい。連れだって歩くのだって気分がいいし。まあそれは修矢も一緒だろうけど」

自分の美貌を充分にわかっているモノのセリフだ。思わず苦笑が漏れる。

「でも結婚となると、話は別。私、修矢と２４時間３６５日一緒に過ごすことなんて、考えられない」

有紗は、まっすぐに修矢を見て言った。

２４時間３６５日ではない。

自分は仕事が忙しいし、有紗だって飲み会だ習い事だと飛びまわ

っているではないか。
そう思ったけれど口を挟む気もおきず、黙ってコーヒーを飲む。
「修矢と私で、結婚なんて出来る訳がない。それは……あなたもそうだと思っていたんだけど」
あきれ顔で何度もそう言われると、間違った選択をしているのは修矢なのだろうかという錯覚に陥りそうになる。
それなりにケンカもなく、ほどよい距離で上手く付き合っていた。身体の相性だって悪くない。
彼女といると、自分の株もあがる。不満はない。
だからこそ“これでいいか”と思った結婚相手のはずだったのに、有紗の頭ごなしの否定に、正直修矢は面食らっていた。
「結局……修矢は私のことなんて、全然見ていなかったのね」
ため息をつきながら、有紗は脇に置いていたバッグを手にとった。
「いい機会だから……別れましょう」
「は？」
「修矢が付き合うことの延長に結婚を見ている以上、これ以上私たちの付き合いを継続することはできないわ。お互いの目的が違うんじゃ、不毛な付き合いになることが目に見えてる」
まるでビジネスの付き合いを打ち切るかのように、有紗が冷たく言った。
「それじゃあ」

そう言うと、すっとスマートに腰を上げた。
就職するまではモデルをしていたのが自慢の彼女は、流れるような仕草で方向を変え、コツコツとヒールの音を響かせながらレストランの入り口へと消えていった。

あまりの事態に、その背中を見送るしかできなかった修矢が、はっと気づき手を握り締めた。

ハイクラスなレストランでの静かなやり取りに気づいた人はいないだろうが、それでも自分の置かれた状況に急に敗北感が訪れた。
ノロノロとテーブルの上に置かれたままのリングケースに手を伸ばし、それをポケットにしまう。
振られた、というよりは、人生設計を狂わされたという気持ちだった。
悲しいという感情でなく、代わりに疑問が胸をうずまく。

（どうしてだ？　何がマズイっていうんだ？）

急に腹立たしい気持ちが押し寄せてきて、勢いにまかせてガタンと大きな音をたてて立ち上がった。
その音に驚いたウェイターと何人かの客をこちらを見ているのがわかったが、かまってはいられない。

今日は、このホテルに部屋をとっていた。
しかし、その必要はなくなった。

予め用意しておいたカードキーを胸に入れたまま、気づくと修矢はホテルを出て夜の街へと歩きだしていた。

親友の鈴木を呼び出し、なじみのバーで浴びるように酒を飲む。

「どうしたんですか？古村さん」

カウンターの向こうの女性バーテンダーが、心配そうに修矢を見つめていた。

「しーっ、彩ちゃん。コイツ今日、プロポーズが失敗したんだから」

「えっ！」

思わず大きな声を上げたバーテンダーの彩が、慌てて口を抑える。

「ごっ、ごめんなさい」

「別に……」

じろりと隣の鈴木を睨む。彩は関係ない。というか、その驚きはもっともだと思う。

「もしかして……たまに一緒に来てくださってた、あのモデルみたいに綺麗な女の方ですか？」

彩の言葉に無言で頷く。

有紗のことを『綺麗』と表現される度に、修矢はいつも得意気な気持ちになっていた。

自分の所有物を誉められるのは、誰だって悪い気がしないはずだ。

「そうですか……そんなにお好きだったんですね」
しみじみと呟く彩の言葉に、思わず顔を上げる。
「……好き？」
「はい」
神妙な、悲しそうな表情で彩が頷いた。
しかし修矢には『好き』という単語がなんだか異質なものに感じられた。
「好き……というのは、違うと思うけど」
「あ？　お前何言ってんだ？　好きだから、プロポーズしたんだろ」
鈴木が、呆れたように修矢の顔を覗きこんだ。
「好きだから、一緒にいたいから、結婚しようと思ったんですよね？」
たたみ掛けるように彩が言う。
「そういう訳でもないけど」
「は？」
「え？」

彩と鈴木が、驚いたように同時に言った。

「じゃあどうしてプロポーズしたんですか？」

戸惑いながら彩が問いかけた。

「どうしてって……俺も２９でアイツも２８だし、そろそろ年齢的には結婚を考える年だろ」

「それだけじゃないだろ？」

何故か鈴木が同情をにじませた表情で背中をぽんぽんと叩く。

「無理しなくていいって」

「無理って……」

わざとらしいその仕草に嫌悪を感じ、背中に置かれたままの鈴木の手を払いのけた。

「今の会社でこれ以上出世しようと思ったら、“妻帯者”って肩書がある方が都合がいいんだ。家のことをやるのも面倒だし、自分のことをサポートしてもらって、仕事にも集中したいし」

「ちょっと待て。じゃああの綺麗な女を、お前は好きって訳じゃなかったのか？」

驚いたように目をみはる鈴木に違和感を覚える。

そうだ、こいつは恋愛結婚の上、今でも嫁さんにベタ惚れだった――そのことを今さらのように思い出した。

それでも、修矢が考えを変える必要はない。
「好きだとかキライだとか、俺は結婚にそんなの必要としてない」
「……ちょっと私、相手の女性に同情します……」
彩の言葉に思わずむっとして眉をしかめた。
「彩ちゃん、どういう意味？」
「古村さんって……」
彩がグラスを拭く手を止め、まっすぐに修矢を見つめた。
「恋愛、したことないんですか？」
「は？」
思いがけない問いかけに、今度はこっちが驚く番だった。
「恋愛って、俺のことといくつだと思ってんの？」
「そーだよ彩ちゃん。こいつはねー、高校の時から女をとっかえひっかえ、そりゃあ数々の武勇伝を……」
「だから、付き合った女性の数とかじゃなくて」
拭いていたグラスを静かに後ろの棚に並べてから、彩が言った。
「恋愛ですよ、恋愛。相手を想って涙流したりとか、会うと胸が苦

しくなるくらい嬉しいとか、きゅんっとするとかぁ……」

「はっ！　あほらしい」

つまみのピスタチオを、ぽいっと口の中に放りこんだ。

「……ないんですね。恋愛したこと」

「ない訳じゃない」

「嘘。胸が締め付けられるくらい切なくなったりしたこととか、ないでしょう？」

彩の言葉に、何故だかイライラした気持ちが募った。

「女子高生じゃあるまいし。うるさいな」

「ないんだ……」

今度は隣の鈴木が呆れたように呟いた。

「ばかか、お前！　ガキじゃないんだぞ？　恋愛恋愛って、そんなもののために俺は人生設計を狂わされたのか？」

「古村さん、別に失恋して落ち込んでる訳じゃないんですね」

彩が呆れたように言った。

「自分の計画が狂ったから、それで頭にきてるだけなんですね……」

「お前、なんで今まであの女と付き合ってたんだ？」

「なんでって……」

質問の意図がわからないとでもいいたげに、首を振る。

「手っ取り早く言えば、会社で一番美人でスタイルが良かった。これくらいの年で一人身っていうのも、何かと不便だし……身体の相性だって、まあ満足してた」

「それだけか？」

「他になにかあるか？」

「……俺、悪いけど帰るわ」

ため息をついて鈴木が立ち上がった。

「なんだよ？」

「お前が『プロポーズを断られた』っていうから、これはいくら冷酷なお前でも落ち込むだろうと思って飛んできたんだけど……俺が甘かった」

そう言いながら、鈴木は冷ややかな顔で修矢を見下ろす。

「人並みに、お前だって傷ついただろうと思ったんだよ。でも違ったな。お前は自分の人生設計が狂ったことやプライドを傷づけられたことにムカついてるだけで、恋を失った辛さに落ち込んでる訳じゃない。あほくさ」

高校から付き合いの続いている鈴木が、何故そんなことを言いだすのか修矢は理解に苦しんでいた。

「今のお前と飲むことより……俺は自分の家庭の方がよっぽど大事だ」

「オイ」

「じゃあな。ごめん彩ちゃん、俺の分だけ会計してもらえる？」

「あ、ハイ」

慌てて彩が電卓を手に取る。

「悪いけど彩ちゃん、後はよろしく」

「はい。仕事ですから」

自分には全く必要がないと思って求めてもいないものなのに、何故この二人はそんなに憐れむような視線で修矢を見つめるのだろう。

まるで修矢だけが“のけ者”だ。二人のやり取りは、さらに修矢をいら立たせていた。

「じゃあな、修矢」

返事をする気にもならない。

肩をすくめる鈴木を目の端でとらえながら、ぐいっとグラスに残るカクテルを喉の奥に流し込んでいた。

第5話　男の事情・2

「も～古村さん、飲みすぎ！」

情けなくも彩の肩を借りながら、店の外でタクシーを待っていた。鈴木に言われたことがぐるぐると頭を周り、酒がすすみすぎた。気づくと閉店間近の店内の客は修矢しかおらず、近年まれにみるほど酒が回っていた。

「古村さん、一度ちゃんと恋愛をしてみたらどうですか？」

肩を貸してくれた彩の方を見る。

「ちゃんとした恋愛って……なんだよ」

「このままじゃ、まともな結婚もできませんよ。でも古村さんは結婚したいんでしょ？」

「結婚したいっていうのとは少し違う。してる方が、出世に有利ってだけだ」

「今のままじゃ、古村さんの見かけに騙されて奥さんになる人が、かわいそうです」

「客に向かって、随分と失礼なことを言うんだな」

「今はお店の外ですから。お会計も終わってますしね」

へへっと彩が笑う。ふと彼女がつけている香水の香りが、鼻をく

すぐった。
有紗とは全く違う、メンズの香水のような軽やかな香り。さっぱりとしたその香りでさえ、今の自分には甘い誘惑に思えた。
「なあ彩ちゃん、今日、実はホテルに部屋とってるんだ。セミスィートだよ？」
「へえ。プロポーズがうまくいったら泊まるつもりだったんですか？」
嫌なことを思い出させる女だ。
ちっと舌打ちでもしたい気持ちを抑え、そろそろの彼女の背中に手を回す。
「どう？　彩ちゃん。俺とこれから……」
「てやぁ～！！！」
最後まで話が終わっていないというのに、背中にまわった手を彩がひねり上げた。
「痛ぇ！！」
「残念。古村さんと違って、私はちゃんと恋愛してますから」
そういえば以前、酔った客をあしらうために格闘技を習っていると聞いたことがあった。誘う相手を間違えたようだ。
痛む腕をさすっていると、ほどなくして到着したタクシーの後部座席に投げ込むように押しこまれた。

「古村さん」

そう言ってゴソゴソとポケットをあさっていた彩が、一枚の紙を取り出した。

一瞬携帯番号でも教えてくれるのかと思ったが、そうではなかった。

「何、これ。『恋愛部』……？」

「古村さんみたいな人に、必要なところだと思います。話は通しておきますから、是非電話してみてください」

そう言うと、タクシーの運転手に声をかけてドアを閉めた。

「お、おい！」

あわててウィンドウを開ける。

「いいですか、絶対電話してみてくださいね！　それまでウチの店に来るのは禁止ですよぉ～」

そう言って彩はくるりと背を向け、形のいいヒップを振りながら店の中へと消えていった。

「お客さん、どちらまで？」

「あ、ああ……」

タクシーの運転手に忌まわしいホテルの名前を告げると、彩にもらった名刺をもう一度眺めた。

金色の『恋愛部』という文字が、今の修矢にはまるで呪いの言葉のようにうつる。

「……アホくさ」

名刺を無造作にポケットにねじこむと、静かに目を閉じた。

二日酔いに悩まされた週末の間、彩からもらった名刺の存在はすっかり忘れていた。

それを思い出したのは、月曜日になり会社に行ってからだった。

「おい古村、聞いたぞ。お前、あの山上有紗と別れたんだって？」

出社早々、デスクに腰かけたようとしたところで同期の柴田に背中から声をかけられ、目が点になった。

「……まあな」

驚きをひた隠しにして、そう言うのがやっとだった。

別に彼女と別れたことがショックなのではなく、それをすでに会社の人間が知っているということに驚いていた。

「そっかー、どうせお前がふったんだろう？　かわいそうに」

柴田の言葉に、曖昧な微笑みを浮かべる。

が、自分がちゃんと笑えているのかすらよくわからなかった。

「なんで知ってるんだ？」

「いや昨日、山上さんに偶然会ったんだよ、俺」

人の不幸は蜜の味だ。

嬉しそうにやにやと口角を上げる柴田をちらりと見やり、興味が無さそうな表情を必死で繕っていた。

「知らない男の人といたから、思わずお友達？って聞いたら、すました顔で『恋人です』なんて言うもんだからびっくりしてさぁ～。お前、いつの間に別れたんだ？」

「……お前には関係ないだろ」

平気なフリをしようと思っていたのに、口をついて出た言葉はとげとげしかった。

「まあいいけど。あんまり社内の女の子に手をつけると、仕事に障るぞ。じゃな」

ぽんっと背中を叩き、自分のデスクの方へと歩いて行った。

「……どういうことだ？」

椅子に座り、パソコンの起動画面を見つめながら思わず独り言が口をつく。

金曜日に彼女から別れを告げられたのに、日曜日にはもう別の男とデートをし、さらに『恋人』とのたまうなんて。

（もしかして、俺、二股かけられてた？）

猛烈にみじめな気持ちが沸いてきた。

就業時間間際、外出先から会社に戻りエレベーターに飛び乗ったところ、中に乗っていたのは有紗だった。

驚いたような表情を一瞬浮かべてから、軽く会釈をする。

会社での立場は修矢が上だ。

くるりと背を向け自分のフロアのボタンを押してから、重い口を開いた。

「……日曜日に、うちの課の柴田に会っただろう」

「はい。それが何か？」

「恋人といたらしいじゃないか」

「……」

さすがの彼女も口をつぐんだ。

「どういうことだよ？」

そんなつもりはなかったのに、声色はひどく低く、脅すような口調になっていた、

「あなたにそんなことを言われる覚えはないわ」

「何……」

思わず後ろを振り向くと、有紗はひどく冷めた顔をしていた。

「彼からはずっと付き合ってほしいと言われていたの。あなたとの付き合いが終わったから、彼に連絡を取っただけ。“古村さん”から責められる覚えはない」

いつの間にか呼び名が、付き合う前のように“古村さん”に戻っている。

それは至極な言い分で、証拠もなければ隙もない。

腹立たしい気持ちでぐっと口を結ぶと、チンっと軽快にエレベーターの扉が開いた。

「それじゃあ。お疲れ様です」

猫のようにしなやかに、有紗の身体がするりと横をすりぬけていった。

彼女が降りていった後に、エレベーターの壁をがんっと叩いた。

金曜日以上に、プライドが傷ついていた。

こうなったら、俺だって一刻も早く新しい彼女を作ってやる。

もっと大人で、綺麗で――。

そう考えてからはたと気づいた。社内では、見かけやスタイルでは有紗を上回るような女性はもういない。
だからこそ、声をかけたのだ。中身は最悪であったけれど。
携帯にはたくさんの女性のアドレスが並んでいるが、今さら改めて付き合いたいと思うような人はいない。

（悪いのは、俺か？）

やっと気づいた事実に、打ちのめされたような気持ちになった。
ちっと舌打ちをしてポケットに手を入れた時に、ふと名刺のような物に触れた。
なんだろう――そう思って取り出し、思わずアッと声が漏れる。

金曜日の夜に、バーテンダーの彩からもらった名刺だった。
あらためてよくよく眺めると、「恋愛部」という文字が妙に今の修矢をそそっていた。

『古村さん、一度ちゃんと恋愛しないと』

そう言ってくれた彩の顔が浮かぶ。

（どうせ……このままじゃ出会いも何もないんだ）

普段だったら絶対にこんな行動はしないはずなのに、たたみかけるように起きる出来事が、少しだけ思考を麻痺させているようだ。
エレベーターを下りると人気のない喫煙コーナーへと足を運び、名刺に並んだナンバーに電話をかけていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0617v/

ここは恋愛部

2011年8月24日15時54分発行